

「神」と「わたし」の哲学

キリスト教とギリシア哲学が
織りなす中世

八木雄二著



春秋社 3080円

評・森本 あんり (神学者
国際基督教大学教授)

ゆっくりとした時間が流れている。読書の愉しみの一つは、著者が費やした途方もなく長い思索の時間の一部をお裾分けしてもらったことだ。

中世思想でもトマストマスの研究者は多いが、スコトゥススコトゥスになると世界でも数人し

主観への確信 科学に道

で体制変革を目指すわけでもなく、ただ世界をどのように理解すべきかを巡って論争を繰り返す。この自由な活動がヨーロッパの知性を彫琢したのである。

その普遍論争のさなか、アンセルムスは神の存在証明に専心する。彼の証明する神は、はじめから祈りのうちに存在が知られている二人称の神(あなた)である。だからその証明は、無神論者を説得する手段などではなく、神を信じている自己の存在を問う哲学の粹なのである。

人が何かに出会うなら、それは個別の存在である。だから、誰も教義が定めるような三人称の「普遍」の神に出会うことはない。信仰は常に一人称であり、神は常に「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」という個人的な神なのだ。

この一人称の確信の持ち方が、スコトゥスやオッカムを通して近代以降の科学的認識へと道を拓く。客観的認識の真理性も、主観的経験に根拠をもつからである。ガリレオの個人的経験は、少しずつ共有されるようになり、その輪が広がってはじめて客観的真理とみなされるようになった。著者は現代人の安易な「科学信仰」を危惧するが、それはこの主観的真理の確信をどこかへ置き去りにしてしまった当然の結末なのかもしれない。

のまま重なる。その思想世界に浸り、言語構造に馴染む。この姿勢は、アンセルムスが神に向き合って哲学した姿勢にそのまま重なる。

中世哲学の立ち上がりは、十一世紀の普遍論争である。そんな論争は、政治や経済というこの世の現実には何の関わりもない。その通り。だから決定的に重要なのだ。王権や教会に気兼ねせず、武力

◇やぎ・ゆうじ 1952年生まれ。清泉女子大非常勤講師。専門は、中世イギリスの思想家、ドゥッスン・スコトゥスの哲学。